

トコロ文の構造と機能

井島 正博

はじめに

ここでトコロ文と呼ぶものは、文末で助動詞相当として用いられるトコロダに限らず、接続助詞あるいは接続詞として用いられるトコロデ、トコロガ、また主要部内在型関係節と呼ばれる用法も持つトコロヲ、その他にもトコロ、トコロニ、トコロヘ、トコロカラといった、形式名詞トコロを用いたさまざまな複合辞をもとにした構文のことである。

ただ、それら個々の構文に関する記述は、これまでにも多く見出される。ここで試みたいのは、それらの記述を踏まえて、トコロ文全体を統一的に捉え直すことである。

1 トコロ文の統語構造

トコロが用いられる連体節には、同一名詞連体と同格連体

と、および述語同格連体、それから主要部内在型関係節 (Internally-Headed Relative Clauses) というように、さまざまな場合がある。ここではそれらのあり方に関して、若干の考察を加えておきたい。

1・1 同一名詞連体と同格連体

同一名詞連体と付加連体という相連と、トコロが表わす意味、すなわち本来の「空間的な場所」と派生的な「場面・状況」という大きく二つに分けられる意味とは、およそ対応しているようである。すなわち、「空間的な場所」の場合が同一名詞連体であり、「場面・状況」の場合が同格連体をしているようである。たとえば (1) a・b のように補文中が同一であったとしても、主文中でトコロが「空間的な場所」として用いられているか、「場面・状況」として用いられているかによって、連体修飾のあり方が変わってしまう。

(1) a 「太郎が花子と住んでいる」ところに訪ねて行った。

b 「太郎が花子と住んでいる」ところを目撃した。

すなわち、(1) aは(2) aのように、(その) トコロを補文中に戻すことができるので同一名詞連体であり、(1) bは(2) bのように、補文はトコロ(場面・状況)の具体的内容となっているので同格連体である。

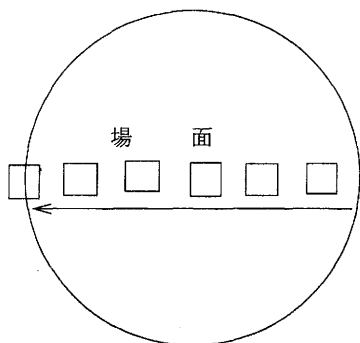
(2) a 「太郎が花子と(そのトコロに)住んでいる」

b 「太郎が花子と住んでいる」トコロ(場面)

そもそも「場所」と「場面・状況」とは、出来事との関係がまったく異なる。「場所」は出来事の起こる場、すなわちある「場所」で特定の出来事が起こると認識される(3) a)のに対して、「場面」は出来事の特定の局面として、すなわちある出来事を構成する複数の場面が、映画のフィルムのように、時間的展開に添って並んでいると認識される(3) b)と考えられる(図表一— a・b)。

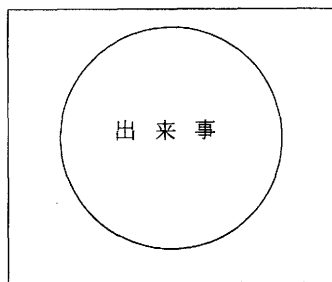
(3) a 昨日大田区で火災があった。

b 国会も終盤を迎えた。



出来事

図表一— b 場面・状況



場所

図表一— a 場所

このような意味で対極的な方向への意味拡張は、次のような経緯を考えることができる。すなわち、「場所」とはいつでも、出来事が発生する背景的な場だけではなく、全体に対する部分としての「場所」（以下では「箇所」と呼ぶ）として用いられることもある。これらは同一名詞連体を作ることからも、まだ「場所」の用法であると考えられる。

(4) a かゆいところに手が届く。(二その)箇所がかゆい)

b 計算が間違っているところを指摘する。(二その)箇所の計算が間違っている)

それが、出来事を全体とする部分、すなわち「場面」へと比喩的に拡張することによって、同格連体をする「場面」用法が成立したものと考えられる。このトコロの同格連体用法が、多くのトコロ文で用いられている。

1・2 主要部内在型関係節

主要部内在型関係節 (Internally-Headed Relative Clauses)

という名称は、Kunoda (一九七六/七七) によって与えられたもので、(5) a のように、主節動詞(「捕まえる」)の意味的な目的格である「泥棒」が、「泥棒が逃げようとする(ところ)」という補節の中にある構文のことであり、(5) b のように外にある場合を、主要部外在型関係節と呼ぶ。ちなみに Kunoda (一九七六/七七) では、(5) a は深層では(5) c のよう

な構造をしており、そこから外在する主要部「泥棒」が消去され、トコロ節は名詞句から遊離して副詞節になるという。

(5) a 警官が泥棒が逃げようとするところを捕まえた。

b 警官が逃げようとする泥棒を捕まえた。

c 警官が「泥棒」泥棒が逃げようとするところ「[e]」を捕まえた。

d 警官が「泥棒が逃げようとするところ」を捕まえた。

この主要部内在型関係節は、トコロ文の中でも、トコロにしか現われない。ちなみに、日本語の歴史の中では、主要部内在型関係節は準体表現として広く用いられており、そこから接続助詞へと展開するありさまが早くも石垣(一九五五・一一)に描かれており、近藤(二〇〇〇・一二)でも詳細に究明されている。

2 トコロダ

トコロダ文には、言うまでもなく、ある出来事に関わる場所を表わす、同一名詞連体で用いられる場合も存在する。

(6) a K村というのは、そこで死んだ藤木忍の伯父さんの家のあるところだった。 福永武彦『草の花』 416

b 「しかし、なんだよ……わたしが、あとを追って来たから、いいようなものの、この辺は、あんた、塩あん

こと言つて、大も近づかんようなところだからねえ……
まったく、あぶないとこだった……」

安部公房『砂の女』 387

c 「そう、去年の夏ごろからかしら、——舞い戻つて来たのよ。神戸は私にとって、執着に値するところだからよ」
新田次郎『孤高の人』 874

他方で、実例を探すことは難しいが、場面を表わす同格連体で用いることもできる。

(7) a この写真は、大統領が飛行機から降りたところですよ。

(前田(二〇〇一・三)より)

b この場面は、義経一行が関所を越えるところだ。

このような同格連体を述語に持つ名詞述語文の主語部分が欠落したものが、アスペクトの一形式とも言われるトコロダ文であると考えられる。しかるに、コトダ文には、同格連体の述語を持つ名詞述語文が多数見出された。それに対して、どうしてトコロダ文には、同様の名詞述語文があまり見出されないのだろうか。一つの可能性としては、トコロダ文は、今ハ：トコロダといった、発話時現在を主語とする名詞述語文として成立したが、この主語「今は」は容易に副詞句と解釈されて、それが欠落したトコロダ文が即座に成立したとも考えられる。

ここで、トコロダに前接する連体節の述語がφ形(基本形)であるかテイル形であるかタ形であるかによって、アスペク

ト的に〈直前〉〈最中〉〈直後〉という意味の違いを表わすと
言われる。ここに見られるタの有無(およびテイル)は、「ア
メリカに(行く/行つた)とき帽子を買つた」の従属節のタ
の有無が、前件と後件との時間的前後関係を表わす相対テン
スであると言われるが、この働きと同じものであると考えら
れる。今(ないし基準時)と連体節で表わされる事態との時
間的前後関係が、φであれば連体節の事態が後で起り(〈直
前〉)、タがあれば先に起り(〈直後〉)、テイルがあれば同
時に起る(〈最中〉)ということなのだろう。ここで、タの
有無は当該の事態が〈実現〉したことを表わすのか、〈未実
現〉であることを表わすのか、と言うこともできる。ちなみ
に〈瞬間〉を意味する名詞(「瞬間・刹那・途端」など)が
時間的な副詞節を構成する複合辞として用いられる場合、副
詞節の述語はおよそタ形でなければならない(たとえば「子
供の無事な姿を目にした途端涙が溢れた」)。これも前件が先
で後件が後という時間的前後関係をタが表わしていると考え
られる。

以下の例は、チョウド：φトコロダという形で、〈直前〉
を表わしている例である。

(8) a 彼が二階からおりてくると、客はちようど帰るとこ
ろだった。 山本有三『路傍の石』 450

b 「俺はとにかく怪しいと思うんだ。この前行つた時、
玄関へ入つて行くと、夫人が丁度自動車に乗るところだ

つたんだ。車の中を覗いて見ると、一人乗っている！」

井上靖『あすなろ日記』183

また、以下の例はテイルトコロダで「最中」を表わしている例である。

(9) a 私がTVのヴォリュームをあげたまましのび足で台所にいってみると、案の定男は黒いビニールのバッグに頭骨をしまいこもうとしているところだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』259

b 僕が疊った午後、門番小屋まで下りたとき、僕の影はちょうど門番を手伝って荷車の修理をしているところだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』352

c 梅田春江の家についたら、子供はミルクをのませてもらっているところだった。 立原正秋『冬の旅』363

d 「お帰んなさい。お風呂がわいていますよ」と、襖ごしに声だけかけた。晩飯の前に、まず風呂にはいれという意味である。襖を開けると、女房は編物を片づけているところだった。食卓には白い布がかかっている。

松本清張『点と線』58

以下の例は、タトコロダを用いて「直後」を表わす例である。

(10) a 丁度演説会が終ったところだ。聴衆の群は雪を踏んでぞろぞろ帰って来る。思い思いのことを言う人々に近

いて、それとなく会の模様を聞いて見ると、いずれも激昂したり、憤慨したりして、一人として高柳を罵らないものは無い。

島崎藤村『破戒』615

b 夜、芝の安さんの家へ行く。若いお上さんが、眼を泣き腫らして病院から帰って来たところだった。少しばかり出来上っている品物をもらってお金を置いて帰る。

林芙美子『放浪記』56

c このとき、職員室の方で戸のあかる音がした。利兵衛は細目にあけていた戸を閉めた。安が洗濯室に小走りに歩いて行き、窓から職員室の建物を見た。院長ともう一人の職員が建物から出てきたところだった。やがて二人は坂道の方に降りて行った

立原正秋『冬の旅』301

d 「どうしたんだい。先週の火曜いらいはじめてだろう。

病気でもしていたのかと心配していたところだった」安が威勢のよい声をかけた

立原正秋『冬の旅』534

ちなみに、森山（一九八四・一〇）、洪（一九九四・三）、

馬場（一九九八・五）、前田（二〇〇一・三）に見るように、タトコロダはタバカリダと類義関係にあり、その違いが問題にされる（φバカリダ、テイルバカリダはアスペクトを表わす用法を持たない）。前田（二〇〇一・三）によると、タトコロダは、(11) a・bのように、副詞「まだ」と共起しにくく、タバカリダは、(12) a・bのように、副詞「やっと」と共起しにくいという。

(11) a この本はまだ買った（*ところ／ばかり）です。

b 講演会はまだ始まった（*ところ／ばかり）です。

(12) a やつと終わった（ところ／??ばかり）です。

b やつと帰った（ところ／??ばかり）です。

このうち、タバカリダに関しては、「ある動作・出来事が起こってから発話時までの時間が短いという話者の判断」を表わすために、「まだ」は自然であるが、「やつと」は不自然であるという説明は充分に納得できるものである。またタトコロダは、出来事の一連の展開過程のうち、ある（場面・状況）を表わすトコロダに、〈場面状況〉が実現したこと（直後）を表わすタが加わったものと考えられるが、そうすると「やつと」は出来事の展開の最終段階を表わすために自然に用いられるが、「まだ」は出来事の展開段階を表わすものではないために不自然となるのだろう。

また、森山（一九八四・一〇）によると、動詞の種類によつてタトコロダは不自然であるが、タバカリダが自然なものがあるというが、出来事の展開の一段階としては用いにくい動詞の場合はタトコロダが不自然ということなのだろう。

(13) a 私は結婚した（*ところ／ばかり）だ。

b うちの娘は大学生になった（*ところ／ばかり）だ。

c あの議員は当選した（*ところ／ばかり）だ。

d 殺人事件が起きた（*ところ／ばかり）だ。

また、以下のように仮定条件を承けるトコロダ文も見出される。これも、原則としてアスペクトのトコロダ文と異なるものではないと思われる。すなわち、いわゆるアスペクトのトコロダ文は現実の時間の流れの中で、今現在（あるいは示された基準時において）どのような状況にあるかを述べる文であったのに対し、仮定条件を承けるトコロダ文は、仮定された時間の展開の中で、今現在（あるいは示された基準時において）どのような〈場面・状況〉にある（はずであった）かを述べる表現であると言ふことができるだろう。

(14) a 「…あなたが教えて下さらんかったらこの先何日もある子は音なしで暮さねばならんところだった。…」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』158

b 窓の上の軒をつたうようにして落ちていく水滴が見えなければ雨が降っているのかどうかよくわからないところだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1180

c 「あの時帰して丁えは石は仕舞まで、厭な女中で俺達の頭に残るところだったし、先方でも同様、厭な主人だと生涯思うところだった。両方とも今とその時と人間は別に変わりはないが、何しろ関係が充分でないと、いい人同士でもお互に悪く思うし、それが充分だといひ加減悪い人間でも憎めなくなる」 志賀直哉「流行感冒」196

d 指摘されてみると、説の内容も正論だ。星は商売の体

験で知っていたわけであろう。官庁としても、改正前に気づいていれば、それを条文に盛りこんでいたところだ。しかし、立案前に星に相談することなど、衛生局としてできたものではなかった。

星新一『人民は弱し官吏は強し!』134

また、実現しなかった直前相のトコロダッタという表現も見出される。これも仮定条件を承けるトコロダ文が実現されなかったことを述べるのと共通するが、必ずしも仮定を必要とせず、可能性としてあり得た(多くは望ましくない)事態を、「危うく・もしかしたら・へたをすると」などの副詞を伴って(少なくともそのような意味合いを伴って)表現するものである。

(15) a その消え方があまり唐突だったせいで、私は一瞬体のバランスを崩し、危く足をすべらせてしまうところだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』847

b ロープはぐつしより濡れていたのだ。水はかなりの高さまで上昇していたのだ。たしかに彼女が言うように、ロープに辿りつくのがあと四、五分遅れていたら危いところだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』901

他にも、以下の例に見るように、多く数量詞と共に用いられ、概数を表わす(トイウ・トイッタ)トコロダの例も見出

される。これも、トコロダ(場面・状況)を表わすということから説明できるだろう。すなわち、(場面・状況)とは、始まりと終わりを持つ出来事の一連の展開の一段階と了解できるだろう。数量詞の表わすスケールも、ある数量はその中の一段階として規定できる。このようにして、出来事の展開の中で一段階という意味でのトコロダが、数量詞のスケールの中での一段階というように意味拡張することは自然な展開であると了解できる。

(16) a 年は三十代後半か四十代のはじめといったところだった。身長があと二十センチも あれば二枚目のTV俳優として十分通用しそうに思った。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』441

b 彼女はさつき私が危く落下しそうになった穴にライトをあてた。穴はまるでコンパスを使って描いたような綺麗な円形で、直径は約一メートルというところだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』832

c 「三十五、六歳というところだな。山村の奴が、おまえのおふくろはいま三十歳く らいか、だなんて言っていましたからね」 立原正秋『冬の旅』611

d 「この池の水温は、おそらく真冬は十五度から、真夏は二十四五度というところでしょう。青子や種鯉の放養には申しぶんありません。適温ですね。素晴らしい条件を

そなえています」

井伏鱒二『黒い雨』 56

3 トコロデ

歴史的に、ガ・ヲ・ニに代表される、格助詞出自の形式が接統助詞用法を獲得したものは、多くの場合〈逆接確定〉を表わす。また、接統助詞から接統詞に展開する場合も、ガ・ケレド・ノニのように、〈逆接確定〉という意味をそのまま保持する場合が多い。トコロ文の場合も、後に見るトコロガはまさにそのような展開の流れに位置付けられる。

しかるに、トコロデは接統助詞用法では〈逆接仮定〉を表わし、接統詞用法では〈場面転換〉を表わす。ちなみに歴史的には、轟岡（一九七二・三）によると、近世には接統助詞用法のトコロガも〈逆接仮定〉を表わすことがあった。〈逆接仮定〉は近世の一八一〇年頃から近代の一九二〇年頃まで見出されるようであるが、トコロガはそれ以前から現代に至るまで〈逆接確定〉でも用いられており、〈逆接確定〉が拡張して〈逆接仮定〉を表わすようになったと考えられる。それに対して、トコロデの〈逆接仮定〉は近代の一八八〇年頃以降に見出されるようになるが、これ以前から現代に至るまで、〈逆接確定〉で用いられた用例はまったく見出されない（ここでは近世初期の〈逆接確定〉の例は問題にしない）。このことからすると、トコロデは〈逆接確定〉から〈逆接仮

定〉が派生したのではなく、他の径路をたどって〈逆接仮定〉という意味用法が成立したと考えざるをえない。ちなみに、デには「公園で遊ぶ」のように、そもそも動作位置、すなわち〈場所・場面〉を表わすものがあり、それがまさに〈場所・場面〉を表わす形式名詞トコロと結び付き、トコロデは〈場所・場面〉を表わすのが本来であったと考えられる。そこから、接統助詞用法では〈逆接仮定〉、接統詞用法では〈場面転換〉を表わすように展開したものと思われる。その経緯を以下で見えていきたい。

3・1 接統助詞用法

さまざまな派生形態が条件節を構成する場合、しばしば逆接確定条件節となる。たとえば、トコロデと近い形である後に見るトコロガは、接統助詞用法、接統詞用法いずれも逆接確定となる。しかるに、トコロデは接統助詞用法では、逆接仮定を表わす。ここにはどのような経緯があるのだろうか。問題は特に、確定でなく仮定であることに集中する。

本来のトコロの意味に近い〈場所〉ないし〈場面・状況〉の意味で用いられている場合に、確かに実現した事実を表わす場合は決して少なくない。

(17) a 起伏の多い藪の中を水音に導かれるように十分ばかり進んだところで、突然眺望が開けた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 399

b 「そのことと、れいの一件を打切ったということなにか関係があるのですか。」「あるね。いや、論理的にあるかないか知らない。しかし、こないだあの墓場の中で、坂をおりきったところで、大きい木の、あの枝がにゅつと突き出ている下に来たときに、ぼくはとたんに首をくくることが、くくらないこと、正式に結婚すること、しないことなんぞを、同時にごちゃごちゃとかんがえた。

石川淳「処女懐胎」 519

c 死者は五十歳の外務部員で、昨日の朝、広島市内の自宅から出勤しかけたところで被爆したのだそうだ。頬が灰色に変色して腫れあがり、しかし視力も聴覚も衰えていなかったとのことである。 井伏鱒二『黒い雨』 282

d 稜線よりも、一本内側の細い道を右に折れ、しばらく行っただころで、老人が、暗がりの中に身をこごめ、手を打ちながら大声で叫んだ。「おい、婆さんよおー」

安部公房『砂の女』 40

e 加藤はためらった。ためらいながら、百メートルも歩いたところで、加藤は北村安春にひよっこり出会ったのである。 新田次郎『孤高の人』 186

f 陽はまだ東の松並木の先にあった。七時を少し廻ったにすぎない。街道を右へ曲ったところで吟子はふと利根へ行ってみようかと思つた。堤までは畑の近道を抜けられ

ば十分とかわからない。 渡辺淳『花埋み』 403

さらに、デは格助詞であっても、トコロが時間的な(場面・状況)を表わす用法も見られる。

(18) a 「女と云うものは全く度し難いけど、だ」ある日良人は癪癪まぎれにこんな事を思った。それから暫くして幾らか機嫌が直ったところで、彼は又こんな事を思った。

志賀直哉「転生」 315

b 中津は此処まで、話したところで、改めて私の顔を見ていった。 志賀直哉「冬の往来」 373

c 「去年病院にいた時にも、若し先生が好きになつたら大変だ、そう考える方なのよ。本統に貴方だけ想つて満足しているのに……」妻は幾分落ちついたところで不図こんな事をいい出した。 志賀直哉「山科の記憶」 401

d 「こんど、いつしよにお茶をのまないか」ウエートレスが名刺の字を読み終ったところで彼は声をかける。間はずさない彼のこのようなささいなことはまことに上手だった。 立原正秋『冬の旅』 989

しかるに、(場面・状況)の意味は、実現した事態に限って用いられるわけではない。未実現ないし一般的な事態におけるある(場面・状況)をトコロデで表わすことも珍しくなく、すなわち、トコロは当該の事態の実現・未実現に関わりなく、一連の事態の展開のうちのある場面・段階を表わすことが出来るものと考えられる。ただ、いずれもある場面・状

況が実現した段階において後件の事態の成立、命令、意志、提案などを述べる表現であり、原則として前件には事態の(完了)を表わすタが用いられる。

- (19) a 「そのうちに落ちついたところで君をひきとりに来るよ」と僕は言った。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 209

- b 「技師になったところで嫁を貰わないか。君の同期生は、半分以上は嫁を貰っているぞ」影村は、なんとなく高飛車たかびしやだった。

新田次郎『孤高の人』 966

- c 子供が支えになっているとはいえ、厚子は、このままでは、自分がどこか思いがけないところで崩くずれれてしまうのではないだろうか、と思わずにはいられなかった。

立原正秋『冬の旅』 363

- d 「十六」「セクステインか(マズイシャレ!)。どうだい歯の修繕がすんだところで昼めしを食いに行こうなにがいい? 田村町の中国飯店へ行ってみるかな(マズイ、マズイ、ザクロガ近イノデママニ会ウオソレガ、ナキニシモアラズ)。それとも芝のクレツセントにするか」

倉橋由美子『聖少女』 48

未実現のトコロデは、割合からすれば決して多いわけではない。しかしながら、トコロガなどの形式は、実現した事柄しかとることができないことに鑑みると、トコロデが未実現の事態をとることができることは看過できない特徴という

ことになる。この未実現の事態を表わすトコロデから逆接仮定を表わす表現が成立したと思われる。

さて、トコロデはテモ・タツテと同様に逆接仮定を表わすというものの、前田(一九九四・八)にも指摘されているように、いくつかの違いがある。テモ・タツテは(20) a・bのように、複数の条件節、特に(20) bのように対立する条件節であつてもとることができるのに対して、トコロデは(20) a'・b'のように、そうすることができない。

- (20) a ご飯を食べても酒を飲んでも太らない。

a' *ご飯を食べても酒を飲んだところで太らない。

b ご飯を食べても食べなくても太らない。

b' *ご飯を食べたところで食べなかったところで太らない。

このことは、テモ・タツテは複数の条件節のどれをとつても帰結は同じであることを表わすことに重きがあるので、前件には複数の条件節がそのまま現われることが可能である。それに対して、トコロデは、ある条件を設定して、その条件が実現された「場面・状況」で、どのような帰結が生ずるかを表わすことに重きがあるために、前件として複数の条件節をとることができないと考えられる。

また、テモ・タツテには主節の肯否についての制約はないが、トコロデの場合主節は否定が典型であるという。

- (21) a そんなに一生懸命勉強しても合格できませんよ。

a' そんなに一生懸命勉強したところで合格できませんよ。

b そんなに一生懸命勉強しなくても合格できますよ。

b' ? そんなに一生懸命勉強しなかったところで合格できますよ。

その理由に関して、前田(一九九四・八)は、事実関係を表わすトコロデの用法に対して、それが実現しなかった場合、相手が持つている「一生懸命勉強すれば合格できる(だろう)」という肯定的な期待を打ち消す話し手の発話であるため、主節は否定的な内容となると論じている。

以上のような(タ)トコロデの用例は、以下のように決して珍しくない。

(22) a たとえば地球が球状の物体ではなく巨大なコヒー・テーブルであると考えたところで、日常生活のレベルでいったいどれほどの不都合があるだろう? もちろんこれはかなり極端な例であつて、何もかもをそんな風に自分勝手に作りかえてしまうわけではない。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』20

b 「ただ金、金とさわいだところで、金がふつて来るはずもなからう。だが、せつかく来たものだからすこしぐらいなら用立ててもいい。洒落や道楽で出すわけじゃない。きみに早く帰ってもらおうと思ってな。こっちはいそがしいからだだからきみの相手なんかしておれん。」

c 彼は洋画家の鳥山と話していたが、気持はやはり落ちつかなかった。もう執着はない。このまま続けて行つたところで、新しく生れる気持はなく、不快な事だけが積み残されて行く関係ではもう一度郁子を欺き、それを続ける気はなかった。 石川淳「山桜」169

d 「あの男もあの男なら、六左衛門も六左衛門だ。そんなところへ娘をくれたところで何が面白からう。これから東京へでも出掛けた時に、自分の聲は政事家だと言つて、吹聴する積りなんだろうが、あまり寝覚の好い話でも無からう。虚栄心にも程が有るさ。ちつたあ娘のことも考えそうなものだがなあ」 志賀直哉「晩秋」434

e そのころの日本では、外人がどんなに悪いことをしても、外人をつかまえて裁判する権利がなかった。領事館に突き出してみたところで、彼らはうちわ同士で裁判をやるのであるから、ほとんど罪になるといことがない。そして、あべこべに、日本のほうに苦情を持ちかけてくるのが、いつも、きまったやり口だった。 島崎藤村『破戒』289

f ヨシツネさんは善良そのものに見えるけれど、どうにも話が合いそうにもない。私がこのひとの二階へ行つて寝たところで、私の人生に大したこともなさそう。このひとと一緒になつたところで、私はすぐ別れてしまう 山本有三『路傍の石』94

に違いない。ヨシツネさんは平和なひとだ。

林美美子『放浪記』 725

それ以外には、ミタトコロデハの形で判断の基準を表わす用法も見られる。

(23) a 今のうちなら、何でもなしに、おつき合いをやめることができるでしょう。間違いがあつてからでは困るからね。あの人は第一、私の見たところでは、お前の結婚の相手になれるような人とは思われませんよ。結婚は一生のことだからね。

b 「ですから世間の人が欺^{だま}されていたんでしよう」「そうですかねえ。解^{わか}らないものさねえ。一寸見たところでは、どうしてもそんな風に受取れないがねえ」

c 菊雄も河豚も、いずれも学齡^{がくれい}期以前にこのような疵^{きず}を受けたのであつた。木場院長のみたところでは、学齡期以前に受けた疵は殆ど^{ほとんど}といつてよいくらい直らないのが普通^{ふつう}であつた。学齡期前に人間性が出来あがつてしまふ例が多かつたのである。

島崎藤村『破戒』 418

立原正秋『冬の旅』 876

以上のように、トコロデはデが断定の助動詞である場合には逆接仮定用法と名詞述語用法（運用中止）、格助詞の場合には場所用法と、場面・状況用法とが認められる。

3・2 接統詞用法

接統詞用法のトコロデには〈話題転換〉という機能があると言われる。ところで〈話題転換〉という意味機能は、接統助詞には見出すことができず、接統詞のみに見出される。このことは何を意味するのだろうか。恐らく、接統助詞にも接統詞にも見出される、〈順接確定〉〈逆接確定〉などは事態内部での意味関係であるのに対して、〈話題転換〉などというものは、事態の展開を外部から制御する話し手が関与するテクストレベルの意味機能であると考えられる。

ちなみに、〈話題転換〉を表わす接統助詞用法のトコロデの成立は、近代もかなり後のことと思われるが、事態内部における実質的な意味機能から、テクストレベルでの意味機能へと展開していくのは、言語の歴史的な展開のうえでは、一般的なあり方と言えるのではないだろうか。すなわち、トコロデが表わしていた〈場面・状況〉が、事態内部の展開上の場面・状況というところから、話し手が事態の展開を外部からとらえた話題展開の上での場面・状況へと拡張して用いられるようになったと了解できる（これを、たとえばハリディとハッサン（一九七六）の観念形成的機能（ideational function）から対人関係的機能（interpersonal function）ないしテクスト的機能（textual function）への拡張、あるいはスウィーツァー（一九九〇）の内容領域（content domain）から、認識領

域 (epistemic domain) ないし言語行為領域 (speech-act domain) への拡張と言うこともできるだろう。

ここで、接続助詞用法の場合、成立可能な事態を従属節としてトコロデが受けることになるため、その意味機能は事態内部に留まることになる。それに対して、接続詞用法の場合、トコロデは形態上、何も受けるものがない。このことは接続詞用法のトコロデは、事態内部に受けるものがあるのではなく、テキストレベルで、話し手が、それ以前の話題に対して、次にまた異なった話題を提示することを表わすのにふさわしいと考えられる。

とはいうものの、ここまで《話題転換》の内実には触れずに議論してきたが、そもそも対話あるいは独話の中で突然まったく異なった話題に切り替えるということはそれほどしびら起こることでもなく、そのような場合に限ってトコロデが用いられるわけでもなさそうである。また、トコロデは、同じく《話題転換》の接続詞に括られるサテ・デハや複合表現としての「話は変わるけど」などの用法と必ずしも重なるものでもない。

甲田(一九九五・六)は、サテとトコロデの違いについて、『さて』は、先行文脈とは別の新たな枠 (Segment) を設定する働きをもつ。《ところで》には、枠の設定という機能はない。」という仮説を提示して、以下のような例証を行う。まず、「先行文脈との関連を示す語」(ここでは「さっきの」

など)があれば、(24) a・bのようにトコロデは自然であるが、サテは不自然になる。

- (24) a ところで、さっきの話だけど…

b ??さて、さっきの話だけど…

逆に、前の話題に区切りをつけ、新たな話題を提示する場合、特に(25) bのような宣言的発話や(26) bのような遂行的な文の場合には、サテは自然であるが、トコロデは不自然である。

- (25) a 天気予報はこれで終わります。??ところで次は交通情報です。

b 天気予報はこれで終わります。さて次は交通情報です。

- (26) a (みなさんお集まりのようですね。) ??ところで始めます。

b さて始めます。

このことも、(サテはひとまず置いておいて) トコロデに関しては、話し手が話題の展開全体を念頭に置いて、その展開の中のある段階・状況から次の段階・状況に移行するような場合に用いられると言えそうである。川越(一九九五・五)では、トコロデを、従来の「転換」と区別して、Topic shift marker と呼び、「話題レベルのシフト」には具体的に、独話では「話題の変更、参照あるいは補注、補足、本題の導入、関連事項の導入」などがあり、対話では「話題の変更、補足、立場の逆転」などがあるという。また、川越(二〇〇〇・一)では、トコロデの意味機能を「本流から支流へ」「支流

から本流へ」「話題の変更」に分けている。これらもやはり、話し手が念頭に置いていた話題の展開の上での場面・状況の進展のありかたを、具体的に類型化したものと位置づけられそうである。

(27) a 「でも僕が言っているのはごくあたり前という意味なんだ。電車でとなりに座つても注意もひかないし、みんなと同じように飯も食べるし、ビールも飲むし——ところでサンドウィッチをどうもありがとう。とてもおいしかったよ。」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』181
b 「ずるいわま・ア・ちゃん！ あんまり要領がよ過ぎるわよ。——ところで『浜さん』は二階にいる？」「うん、いる、行つて御覧」 谷崎潤一郎『痴人の愛』155

c 「もういい。心理解剖なんかして見せねえでもいい。きみでもひとがなぐれるということが判りやいいんだ。ところで、おれは今ちよつとしたエチケットの演習をしてみようとおもう。西洋人はよくキスということをやるね。親きょうだいでも、友だちでも、色情ぬきで、やたらにちゅうちゅうやる。おれも今その美風をまねして、こゝでてこちゃんにキスする。……」

d 「御苦労さん」と工場長は、浮かぬ顔で云つた。「とこゝで閑間君、広島の人たちはどういふ解釈をしている

かね」 井伏鱒二『黒い雨』646

e 「寒いから、一杯やれ。——なに、出世まえだから。——そうだな。こんなものは覚えないうがいな。それじゃ、おまえは食うほうにまわれ。おれはかつてに飲むから、——ところと、さかなは、なんにするかな、さしみに、タマゴ焼きに、煮ざかなに……」

f 「どうです、せいせいしたでしょう。ところで百と百とをたすと、答はいくらになりますか。」「もちろんそれは二百だろう。」 山本有三『路傍の石』579

宮沢賢治『北守將軍と三人兄弟の医者』270
g 「そりやそうだな。しかし、俺一人だと、あばれだすといけねえから、仲間を一人つれて行くとするか。とこゝろで、おまえ、いくつだい？」 立原正秋『冬の旅』135

h 「いい名前だね（今度ハ名前ヲホメル！）だれがつけてくれた？お父さん？お母さん？」あたしは色を失うところでした。パパがサングラスをかけていたのはさいわいでした。「どこかの知らないおじさんらしいわ。もう死んでしまったそうです」「ふうん。漢字で書けば美しい樹だな。ところでミキは年をいつわたね。サバを読んでるね。ほんとうはいくつだ？」

i 「園子の奴が、ほんとに浮気をしたい相手は加藤なん

石川淳「処女懐胎」442

倉橋由美子『聖少女』47

だ。そのこともおれはちゃんと知っている。ところであの小僧のことだが、君からはっきりいつてやったらどうかね。この俺っていう男がいることを……それであきらめればよし、あきらめないとすれば、こつちにも考えがある」

新田次郎『孤高の人』

1156

j 「そうですとも。神経衰弱ですとも。辰次は昔から小学生のときから神経衰弱でした。あんな途方もないライオンみたいな声で泣いて……。ところで康三郎さん、病院にはあのケー・エヌ丸という薬があるでしょう？ そら、あのお父様がお創りになったお薬が」

北杜夫『榆家の人々』

785

4 トコロヲ

次に、トコロヲについて検討を加えたい。トコロヲには形の上では補文のように見えながら、主文との関わりにおいては項として働く特殊な用法があり、研究者によつては、主要部内在型関係節そのものとは認められないが、主要部内在型関係節と非常に近いものである。ここでは、このようなトコロヲの用法を、主要部内在型関係節用法と呼ぶことにしたい。

その研究は、議論の詳細は省くが、Nakai (一九七三) がこのトコロヲ節を普通の目的語と見なした (28b) のに對して、Harada (一九七三) が、通常では主文と補文とに同一名

詞があつた場合には補文の名詞が消去されるが、この場合逆に主文の名詞が削除される Counter-Equi NP Deletion が適用される (すなわちこの場合の補文は副詞句である) (28c) と論じられるようになって本格化する。

(28) a 警察はその泥棒が逃げて行くところを捕まえた。

b 警察は「その泥棒が逃げて行くところ」を捕まえた。

c 警察は「その泥棒」「その泥棒が逃げて行く」ところを捕まえた。

要するに、トコロヲ節を名詞句と考えるか、副詞句と考えるか、二面性があり判断が難しいということなのだろう。しかるに、生成文法の枠組に立つ限り、どちらかと断ぜざるをえない。

しかし近年、菊田 (二〇〇九・三) のように、トコロヲ節の成立に関して歴史的な観点からの研究が見られるようになってきた。そして主要部内在型関係節は、節と項との中間的な形式で、節から項への移行の過程にある、統語的に非常に不安定なものであると認識されるようになってきた。すなわち、生成文法での議論のように、節か項かどちらかに割り切れるものではないということである。したがって、現代語でも、どのような主要部内在型関係節でも作ることができるわけではなく、許容度も決して高いわけでもない。人によつては、主要部内在型関係節そのものが不自然な表現であると判断される。

ところで、主要部内在型関係節という場合、一般にはノ節のことを指す。確かにノ節は、目的格のノヲの他にも、主格のノガ、あるいは与格のノニ、起点格のノカラも可能であると論じられる。

(29) a リンゴがむいてあったのを食べた。

b リンゴがむいてあったのがなくなっている。

c リンゴがむいてあったのにフォークを刺した。

しかるに、トコロ節の場合、主要部内在型関係節として用いられるのは、トコロヲに限られる。どうしてノ節とトコロ節とはこのように不均衡なのだろうか。菊田(二〇〇九・三三)によると、準体節も歴史的にはまずヲ格の準体節が主要部内在型関係節として用いられ、その後ガ格、ニ格の準体節も主要部内在型関係節として用いられるようになったという。現在、ヲ格のトコロ節のみが主要部内在型関係節として用いられることも、トコロ節が主要部内在型関係節として用いられるようになってまだ日が浅いということなのだろう。

もう一つトコロ節が主要部内在型関係節として用いられることに關して検討すべき点は、むしろノに近いと思われるモノ・コト・ワケなどには主要部内在型関係節用法がなく、なぜトコロにのみあるのかという問題である。この点は、この節の終わりで触れることになるだろう。

さて、主要部内在型関係節となっっているかどうかに関わりなく、トコロヲの用例を見渡してみると、それを承ける動詞

として最も多いのが、意味的に「見る」に関わる述語である(以下杉本(一九九四・三三)に倣って「知覚タイプ」と呼ぶ)。知覚タイプは、対象としては、モノをとることも多いが、コト、というよりも視覚に入った「場面・状況」をとるのが本来であろう。モノの場合も場面・状況の中で中心となる事物を表わすものと考えられる。

知覚タイプの対象がその場で視覚に入った場面・状況であるということは、トコロ節が本来の「場所」から「場面・状況」へと拡張したことと呼応して、まさに相性のいい組み合わせであったことになる。ちなみにここで用いられた連体は、「場面」「状況」が主名詞である場合と同じ付加連体である。

(30) a 通行人が犯人が逃走するところを目撃した。

b 通行人が逃走する犯人を目撃した。

さて、知覚タイプほどではないが、「捕まえる」に関わる述語(以下「捕捉タイプ」と呼ぶ)も少なくなく、従来からこの統語構造が問題とされてきた。すなわち、原則として「捕まえる」の対象はヒトないし有生物であって、コトではないにも拘わらず、形態的には状況を表わすトコロ節が対象となることが問題とされたのである。同様の現象はノ節にも見出される。すなわち、主節で格として働く名詞句が連体節内に含まれる構文が、ノ節とトコロ節とに見出されるのである。

たとえば、(31) a で、「捕まえた」のは「犯人」というヒト

であるはずであるが、対象としては「犯人が潜伏場所から出て来たところ」というトコロ節が用いられている。このことは(31) a'のようにおよそノ節でも表わすことができる。さらに、(31) bのようにヒト対象と状況とを分けて表現することも可能で、また(31) cのようにヒト対象に状況を連体修飾することも可能である。

(31) a 警察は犯人が潜伏場所から出て来たところを捕まえた。

a' 警察は犯人が潜伏場所から出て来たのを捕まえた。

b 警察は犯人を潜伏場所から出て来たところで捕まえた。

c 警察は潜伏場所から出て来た犯人を捕まえた。

しかるに、捕捉タイプが主要部内在型連体節を対象としてとることができる本質は、捕捉タイプが、単にヒトないし有生物をとるだけではなく、「捕まえた」状況もしばしば問題にされるといふ点にあると思われる。

ここまで、「捕まえる」のみで議論してきたが、Harada (一九七六) では、以下のような動詞に主要部内在型関係節が可能であると述べられている。

捕まえる、襲う、助ける、見つける、訪ねる

杉本(一九九四・三)では、これらをさらに拡張して以下のようなタイプに分類している。すなわち、まず以下のようなタイプを「停止タイプ」と呼んでいる。「呼び止める」に

は用いられるが、「呼ぶ」には用いられない。

(32) a 太郎は次郎が部屋の前を通りかかったところを呼び止めた。

b * 太郎は次郎が部屋の前を通りかかったところを呼んだ。

さらに、次のようなタイプを「救助タイプ」と呼んでいる。これも、「助け起こす」「救う」には用いられるが、「救助する」「かばう」「手伝う」には用いられない。

(33) a 太郎は次郎が倒れたところを助け起こした。

b 太郎は花子が酔っ払いにからまれたところを救った。

c * 太郎は次郎が金に困っているところを救助した。

d * 太郎は次郎が先生に叱られているところをかばった。

e * 太郎は女の人が車をぬかるみから出そうとしているところを手伝った。

また、次のようなタイプを「攻撃タイプ」と呼んでいる。これも、「襲う」「突き飛ばす」「撃ち殺す」には用いられるが、「殴る」は若干不自然となる。

(34) a 太郎は花子が油断しているところを襲った。

b 太郎は次郎が崖下を覗き込んだところを突き飛ばした。

c 太郎は狼の団が洞窟から飛び出して来たところを撃ち殺した。

d ? 太郎は次郎がひるんだところを殴った。

そして、次のようなタイプを「捕捉タイプ」と呼んでいる。

ここには「回収する」「連れ帰る」等が用いられる。他に「捕まえる」「摘発する」などが考えられる。

(35) a NASAは人工衛星が軌道からはずれて落下してくるところを回収した。

b 太郎は家出した息子がゲームセンターに来たところを連れ帰った。

杉本(一九九四・三)に挙げられた以上のタイプの他にも、以下のような「遮断タイプ」といったものも考えられる。ここには「邪魔する」「さえぎる」などが用いられ、先の「救助タイプ」の否定として対になるものと考えられる。

(36) a 太郎は花子が真実を述べようとするところをさえぎった。

b 太郎は花子が宿題をしているところを邪魔した。

また、以下のようなものは「飲食タイプ」とでも言えばよいだろうか。

(37) a 天ぶらがおいしく揚がったところをすかさず食べた。

b シラウオが出汁の中で踊っているところを喉に流し込んだ。

また、以下のようなものは「驚倒タイプ」とでも呼べばよいだろうか。

(38) a 太郎がいい夢を見ているところをたたき起こした。

b 太郎が花子の写真を見て惚けているところを驚かし

た。

この他にも、あえて分類しようとすれば、以上の分類には入れることの難しい以下のような例もそれほど不自然ではない。

(39) a 株が暴落しているところを大量に買い支えた。

b 先生は生徒がトイレでタバコを吸っているところを見逃してやった。

c 先生は生徒が問題を解くのに混乱しているところを整理してやった。

以上のように、主要部内在型関係節には、確かにさまざまな動詞が用いられるとも言え、主要部内在型関係節をとることができる動詞を類型化することは厳密には可能ではないように思われる。しかし一方で、同じ意味タイプの中でも用いることのできる動詞が制約されることから、用いられる動詞の意味特徴はかなり限定されているようである。

しかし、どのような動詞が主要部内在型関係節をとることができるかどうかに関しては、以上の動詞の類型を見渡してみることによって、ある程度の見当を付けることはできそうである。すなわち、「見る」「目撃する」「写真に撮る」などの知覚タイプは、何らかの時間的展開の中のある「場面・状況」を対象としてヲ格にとることになる。他方で、主要部内在型関係節をとることができるさまざまな動詞タイプは、何らかの物理的対象に対して働きかけを行うものである一

方、場合によつては、どのような「場面・状況」において当該の働きかけを行うかに関しても問題となるものである。たとえば、「呼び止める」も「呼ぶ」も、誰か具体的な人物に對して行われる動作である点では共通するが、前者が相手がどのような「場面・状況」にあるときに「呼び止める」のかが問題となりがちであるのに対して、後者はそれはあまり問題にされない、という違いが見出されるのではないだろうか。

これまで、トコロ節が表わす単なる付加連体の意味から主要部内在型関係節への拡張に對して、連体のあり方、もしくは名詞句のあり方が注目され、トコロ節については「メトニミー」的な拡張、すなわち全体から部分へ（ここでは状況から対象へ）の拡張が働いてこのような現象が實現されたのだ、というように論じられることがあった（Ohori (二〇〇一・三三)）。確かにトコロ節に注目すれば、付加連体から主要部内在型関係節への拡張は、「メトニミー」といった認知言語学的な拡張であろう。しかし、どうしてトコロ節に限ってそのような特殊な拡張が起こったのかという点に關しては、トコロ節のみに注目していたのでは十分に納得のいく説明にはたどり着けないのではないだろうか。

むしろここで注目したいのは、トコロ節を受ける述語である。「見る」系述語は、本来対象もヲ格にとることができ（「太郎を見た」、「太郎が友達と談笑しているのを見た」）。

他方、「つかまえる」系述語は、本来対象しかヲ格にとるこ

とはできない（「太郎をつかまえた」）が、しばしばその動作が實行された状況も重要なファクターとなる（「太郎を、校門を出て来たところで、つかまえた」）。この両要素が複合したものが主要部内在型関係節ということになるのではないだろうか（「太郎が校門を出て来たところをつかまえた」）。そのような両要素を満たす場合には、以下に見るようにさまざまな動詞で主要部内在型関係節が成り立ちうる。

恐らく、この拡張として、単に状況のみを表わし、対象の意味を持たないトコロも見出される。すなわち、述語に對して、トコロ節が必須格でない場合には、単に状況を説明する働きを持つ副詞節となる。

(40) a 太郎がぐっすり眠っているとところを地震が襲った。

b ゆっくりお休みのところを失礼します。

大まかに言えば、以下のiからiiが派生され、さらにそこからiiiが派生されたと考えるわけである。

i 名詞節

〈知覚内容〉 + 知覚動詞など

ii 主要部内在型関係節

〈動作対象〉

〈動作状況〉 + 動作動詞など

iii 副詞節

〈動作状況〉 + 動作動詞

さて、このような展開を考えたところで、主要部内在型関

係節用法がノとトコロ(ヲ)にしかなく、モノ・コト・ワケにはないのかについて、若干検討しておきたい。ノが構成する連体節は、「モノ」を表わす場合も「コト」を表わす場合もありうるが、モノ連体節はつねに「モノ」しか表わさず、コト連体節はつねに「コト」しか表わさない。それに対して、トコロは「場面・状況」という意味を介して、その「場面・状況」そのものである「コト」を表わす場合も、その「場面・状況」に關与する「モノ」を表わす場合もあり、それが主要部内在型關係節用法を持つようになったのであらうと考えられる。

以下は知覺タイプのトコロヲ節の例である。

(41) a 私は自分がスカイラインの運転席に座り、隣に女の子を乗せて、デュラン・デュランの音楽とともに夜中の都市を疾走しているところを想像してみた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 692

b 私はそれまでアカシアの花をつけているところを見たことがなかったで、それが私の知らないうちにそんなにも沢山たくさんの花を一どに咲かしているからだとは容易に信じられなかったのであった。 堀辰雄「美しい村」 50

c 「おほほほほ」その笑い声には、酒の匂がぶんぶんしました。私は今まで、彼女が酒を飲んだところを一度も見たことはなかったのです。

谷崎潤一郎『痴人の愛』 382

d 「いいえ、そうじゃありません、その想像を確かめる事実があつたんです。明け方、あなたは寝ていらしって御存じなかったようでしたが、僕は眠られなかったたので、二人が接吻するところを、うとうとしながら見ていたのです」 谷崎潤一郎『痴人の愛』 403

e 自分は、お酒を飲みました。そのひとに安心してあるので、かえつてお道化など演じる気持も起らず、自分の地金の無口で陰惨なところを隠さず見せて、黙つてお酒を飲みました。 太宰治『人間失格』 103

次に挙げるのは、主要部内在型關係節を表わすトコロヲ節の例である。

(42) a 地下鉄の線路を歩いているところを駅員につかまったりしたら大変なことになってしまう。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 1155

b 汽車を待つ二三時間は速に経つた。左右するうちに、停車場ステーションとして出掛ける時が来た。さすが弁護士は忙しい商売柄、一緒に門を出ようと為るところを客に捕つて、立つて時計を見ながらの訴訟話。蓮太郎は細君を連れて一歩先へ出掛けた。「ああ、何時復た先生に御目に懸れるやら」こう独語のように言つて、丑松も見送りながら随いて行つた。せめてもの心尽し、手荷物の鞆かばんは提げさせて貰う。そんなことが丑松の身に取つては、嬉しくも、名残惜しくも思われたので。

c 「そ、そうだけど、なに商売にも役に立たねえつてさ。」

ことばでは京造はさっぱり、さえなかった。向こうがたじたじとなったところをおさえて、吾一は上のほうから言った。

山本有三『路傍の石』 42

d 勝手が男の尻に倒された。起きたところをまた倒された。今度はぎゅうぎゅう押えつけられている。

梶井基次郎『城のある町にて』 66

e 総理大臣の岡田啓介は、首相官邸で寝ていたところを襲われたが、義弟の松尾伝蔵が身替りとなって射殺され、岡田は女中部屋にかくまわれていて、翌日午後無事官邸から救出された。

阿川弘之『山本五十六』 351

f 生れてまだ一カ月半にしかない登志子は、眠っているところを起されたが、別に泣き出すこともなく、花子に抱かれてじっとしていた。新田次郎『孤高の人』 1416

g アリはそのまま体をあずけてクリンチに持ち込む。離れると、今度は足を使って得意のジャブを放ち、時には足を止めてスピックスの出でるところを迎え打つ。スピックスが、そのカウンターにもめげず、強引に接近すると、またすぐにクリンチする。

沢木耕太郎『一瞬の夏』 378

h 安の右から走ってきたトラックが安を跳ねあげたのはこのときである。安の軀は一メートルほど宙に浮きあ

がり、道路に叩きつけられたところを、うしろからきたもう一台のトラックが轢いて行つた。

立原正秋『冬の旅』 1031

i 考えた末、伊助が昼寝をしているところを抑えつけようとしたところ、彼はふんどしひとつのまま既に逃げた。

北杜夫『樵家の人々』 8

知覚タイプのトコロヲ節は、知覚の対象である「場面・状況」そのものを表わすものであった。また、主要部内在型連体節をとることができる動詞の諸タイプは、働きかけの対象を要求し、かつどのような「場面・状況」で当該の働きかけを行うかにも関心のあるものであった。そこから、トコロヲ節には対象としての働きはなく、単に当該動作を行う「場面・状況」を表わす副詞節として用いられるトコロヲ節も生まれたのではないかと思われる。

(43) a 「あら、まだ、そんなことを言っているの。」「だって

さ、汽車がゴーつてくるところを、まくら木にぶらさがっているなんて、とてもできるこっちゃないぜ。」

山本有三『路傍の石』 126

b 「いろいろ、あつてね。老朽で来年はやめてもらう番になつていたところを、岬へいけば、三年ぐらいのびるからね。そういったら、よろこんで、しようちしましたよ。」

壺井栄『二四の瞳』 140

c 「おいそがしいところを、たびたびお邪魔します」三

原は腰を浮かせた。

松本清張『点と線』196

d (来る、ということ^みを全軍に言いかせてやろうか)

と思つたのは、一同に希望をもたせてやりたいという思いがきざしたからであつた。援軍がくるときけば、戦闘にはげみも出る。崩れるところを必死に踏みとどまる気にもなろう。

司馬遼太郎『国盗り物語』1882

e 曾祖父^{そうそふ}たちは平野のまんなかにたつと、風を嗅^かぎ、土をなめてから、道具をとつて足もとを掘つた。土を水でねると、木杵^{きね}にはめて陽^ひに乾かし、固まることを待つて杵^{きね}をはずすと煉瓦^{れんが}ができた。 開高健「流亡記」430

5 トコロガ

5・1 接続助詞用法

第3節で検討したトコロデは、接続助詞用法と接続詞用法とはまったく異なつた機能を担つていたのに対して、トコロガも接続助詞用法と接続詞用法とを持つが、いずれも逆接確定を表わす。歴史的に見ても、格助詞から接続助詞へと拡張したガ、ヲ、ニがいずれも逆接確定を表わすことから、逆接確定という機能は、新しく接続助詞や接続詞が生まれた場合、最も担われやすいものであると考えられる。というのも、節と節とが結びつけられた場合、そこに因果関係がなけ

れば、容易に逆接確定という意味が読み取られることになるからである。

また、ここに含まれているトコロは〈場面・状況〉を表わすものであつたと考えられ、トコロガ全体としては前件が実現した〈場面・状況〉において後件が実現することを表わすものであつたと思われるが、現代語のトコロガには〈場面・状況〉という意味合いは感じられない。接続助詞のトコロガ節は、トコロデ節と同じく、必ずタを用いなければならないが、このことも前件が「実現」したことを表わしているものと考えられる。

さて、ここまでは、接続助詞のトコロガと接続詞のトコロガは、いずれも逆接確定を表わすという点で同じであると論じてきた。しかし、両者は常に同じように用いられるわけではない。

前田(一九九四・八)によると、接続助詞用法は形容詞・名詞述語文をトコロガ節にとることはできないが、接続詞用法は前文が形容詞・名詞述語文であつてもよいという。

(44) a *遺産の額は大きかつたところが、誰も遺族の名乗りをあげなかつた。

a' 遺産の額は大きかつた。ところが、誰も遺族の名乗りをあげなかつた。

b *彼はもうすでに社会人だつたところが、一人で病院にも行つたことがなかつた。

b' 彼はもうすでに社会人だった。ところが、一人で病院にも行つたことがなかった。

これは接続助詞用法の場合、トコロガ節に用いられるタが、先に見たように、「実現」の意味を持つので、時間的前後関係のある二つの事態を結びつける働きを持つが、形容詞・名詞述語文がトコロガ節に用いられると、主節との間に時間的前後関係を示しにくくなるために不自然となるが、接続詞用法にはそのような制限はないために自然であると了解できる。

さて、「場所」の意味のトコロが主格として用いられたトコロガも、以下のように用例を見出すことができる。

(45) a 道玄坂を上つて左側、銀行とガソリン・スタンドの角を曲つたところがめざすレストランであったが、その銀行のすこしてまえ、映画館や食堂の灯が夕暮の町を陽気にいるどつている電車で急に車がとまり、「ちえつ、しょうがねえな。」前がつかえているようだね。「ええ。」と助手が首を出して、「道路工事です。」

石川淳「葦手」116

b 昨晚、真夜中、ころ看護婦が病室の見廻りをしていて、矢須子さんが床板に膝をつき、嚔り泣きしながらベッドに凭れていた。事情を聞くと、腫れものの出来ているところが痒くて痒くて苦しいと訴える。

井伏鱒二『黒い雨』513

c 庄吾は持っていた杯を、いきなり、おれんに投げつけた。いいあんばいに、ねらいがはずれて、杯はおれんの横の、封筒の山の上に落ちた。酒のこぼれたところが、ナメクジのはったあとのように、筋になってぬれていた。

山本有三『路傍の石』248

しかしこれらは、以下の接続助詞用法のトコロガとは連続性は感じられない。

(46) a それから、みなさんがしきりに気にしていた、あの坊様が首に吊っていた箱な。あれの中には何が入っていたんやと、ほかの坊様にうかがつたところが、その坊様もふしぎに思つてそつと持ちあげてみたら、大へん軽かつた。何でも、あの中には大きなルビーが入っているということでしたわ。竹山道夫『ビルマの竖琴』197

b 誰もいまいと思つてやつて来たところが、意外にも先客がいた。綺麗な水が流れている曲水のあたりに、立つたり坐つたり、七、八人もいるだらうか。大そう賢く美しいことで有名な、或る女優さんとの対談や、グラビア撮影の依頼が年末にかけて何度もあつた。

五木寛之『風に吹かれて』144

c 不思議に思つてきいてみたところが、昭和四十三年は申年だという。こつちはエトなどという古典的な教養はないので気がつかなかったが、言われてみれば昭和七年九月生れのサルである。五木寛之『風に吹かれて』390

また、近代には、逆接仮定のトコロデと同じように用いられる例も散見される。

(47) a 「…神経は何のためにあるかと云えば健康を出来るだけたもつたにある。しかし人間のようなものに健康を

たもたせたところが始まらないとも思えば思えるでしょう。我々が人間をつくつたのではない。人類が人間をつくつたのではない。道徳や、理性が人間をつくつたのではない」
武者小路実篤『友情』110

b 彼は学校がつまらなくなると同時に、学問に対しても熱が持てなくなってきた。学問そのものを否定するわけではないけれども、学校で教えるようなことをこつこつ習つたところが、なんになるんだ。そういう考えが、最近、強くあたまをもちやげてきたのである。

山本有三『路傍の石』723

5・2 接統詞用法

川端（一九九五・三）は、トコロガの後件に制約があることを論じている。トコロガが自然に用いられるのは、〈概言〉、〈概言（ラシイ・伝聞ソウダ）〉、ノダなどに限られ、〈概言（ヨウダ・チガイナイ・カモシレナイ・様態ソウダ）〉、〈当為〉は若干不自然で、〈命令〉、〈禁止〉、〈許可〉、〈依頼〉、〈意志〉、〈勧誘〉、〈願望〉、〈疑問〉などモダリティ表現はいずれ

も不自然となる。

(48) a 天気予報では午後には雨がやむと言った。ところが雨

は一日中降り続いた。

b *あなたは今日熱があるそうですね。ところが試験を受けない。

c *試験中にノートを見てはいけません。ところが辞書は見てもいいです。

d *彼は昨日は大変元気があった。ところがどうして今日会社を休んでいるのか。

浜田（一九九五・一〇）によると、接統詞用法のトコロガは、デモやシカシなどとは異なつて以下のような特徴があると論じている。

「トコロガQ」という発話を行う話し手は（Pの話し手が誰であるかに関わらず）聞き手の知識の内容を予め予想しており、聞き手の知識からは推測不可能な内容をQとして提示するのである。言い換えると、トコロガにおけるPとQは、単にQが聞き手にとって予想外の情報であるばかりでなく、話し手がPとQの対比を十分承知したうえでQを提示するという意図性にその意味的効果の来源がある。」

たとえば、(49) aの対話では、後の発話の話し手は、前の発話の内容を前もって予測していないためにトコロガが使えないが、(49) bは同一人物の発話であるために、話し手は前の文の内容を前もって念頭に置いて、トコロガが使われている。

(49) a 「私は」エゴイストなの。人の面倒見るタイプじゃないのよ。」

「でも／＊ところが」君、評判いいって言うじゃない。」

b 「君はエゴイストだ、人の面倒見るタイプじゃない、
と思っていた。」

「しかし／ところが」君、評判いいって言うじゃない。」

また、(50) a は対話であるにも拘わらず、B は A の発話の内容を前もって知っている場合にはトコロガが用いられるが、(50) b のように前もって知らない文脈では用いることができないという。

(50) a A: 明日デパートは休みでしょう？

B: 「しかし／ところが」広告に明日からバーゲンだと書いてあったんですよ。

b A: 明日デパートは休みでしょう？

B: 本当ですか？「しかし／＊ところが」広告に明日からバーゲンだと書いてあつたんですよ。

さらに、同じ内容でも、話し手が前後の発話の内容を知っているスポーツニュースの場合 (51) a にはトコロガが用いられるが、それを知らない実況放送の場合 (51) b にはトコロガを用いることができない。

(51) a (スポーツニュースのナレーション)

つまった当たりの内野ゴロ: 「しかし／ところが」こ

れをショートが悪送球。

b (実況放送)

つまった当たりの内野ゴロ: 「しかし／＊ところが」これをショートが悪送球。

ここにも、トコロガを持つ「場面・状況」の意味が働いているように思われる。すなわち話し手あるいは聞き手は、出来事の展開のしかたを前もって想定していたが、実際にはそのようには展開しなかったということを表わすと考えられる。接続詞用法のトコロガは以下のようなものである。

(52) a 自分は音楽家だから、思想や感情を音を使ってしか表現出来ない、とたどたどしい筆で、モーツアルトは父親に書いている(マインハイム、一七七七年、十一月八日)。

ところが、このモーツアルトには分り切った事柄が、次第に分らなくなつて来るといふ風に、音楽の歴史は進んで行った。
小林秀雄「モーツアルト」25

b 私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病気を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだままをその通り口にする、普通の談話と思つて聞いていた。

ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があった。先生自身の経験を持たない私は無論其処に気が付く筈がなかった。
夏目漱石『こころ』134

c 「うむ。大橋登美子を知ってるか。A 型なんだ。ところがな、解剖の結果わかつた事なんだが、登美子のおな

かに居た子供の血液型は、A B型だ。……わかるかい。

O型とA型の両親から、A B型という子供は絶対に生れないんだ。つまりだよ、登美子のおなかの子供はお前の子供じゃなかったんだ。これは学問上まちがいの無い事なんだよ。…」

石川達三『青春の蹉跎』 482

d 作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと思わう当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。ところがその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微していた。

芥川龍之介「鼻」 6

e それから間もなくの事でございます。一夜の内に腰さえ弓のように曲った平太夫は、若殿様の御文をつけた花桶の枝を肩にして、這々裏の御門から逃げ出して参りました。ところがその後から又一人、そつと御門を出ましたのは、私の甥の侍で、これは万一平太夫が御文に無礼でも働いてはならないと、若殿様にも申し上げず、見え隠れにあの老爺の跡をつけたのでございます。

芥川龍之介「邪宗門」 212

f 小僧は少し思い切った調子で、こんな事は初めてじゃないと云うように、勢よく手を延ばし、三つ程並んでいる鮎の鮎の一つを摘んだ。ところが、何故か小僧は勢よく延ばした割にその手をひく時、妙に躊躇した。

志賀直哉「小僧の神様」 208

g 薫さんの年に就て誠に迂濶な話ではあるが、僕はこれまで判然考えたことはなかった。只漫然四十越した小母さん——姉というよりも明かに小母さんという気持でそれを考えていた。ところが、姉の話によれば、姉と五つか六つ違い、自分から云えば六つか七つの違い、——そうなると、ここに今まで全く考えられなかった事が考えられて来た。

志賀直哉「冬の往来」 369

h 僕は野津大尉と知りあいだと云ったので、その軍人は「やあ、どうも御苦労でした」と云って封筒の中身を読みかけた。ところが、「こりやあ困る。これはいかん」と云って僕に突き返した。

井伏鱒二「黒い雨」 332

i 「まあ聞いて下さい。万更の他人が受賞したではなし、定めし瀬川君だつても私の為に喜んでいてくれるだろう、とこりやあ、まあ、私が直接に聞いたことでは無いのです。こりやあ、まあ、私が直接に聞いたことでは無いのですけれど——又、私に面と向つて、まさかにそんなことが言えますまいが——というのは、教育者が金牌などを貰つて鬼の首でも取つたように思うのは大間違だ。」

島崎藤村『破戒』 44

j そう云う彼が杉子を見て、すぐ自分の妻としての杉子を思うのは当然であつた。彼はそう云う女を求めている。そして杉子がそう云う女ではないかと私かに思つてい

た。ところが事実は理想的以上に見えた。自分には少し勿体^{もったい}なさざるようにさえ思えた。そして仲田が、その女を自分の妹あつかいし、馬鹿にしているのを勿体ないことをする奴だ位に感じた。

k 「校長の意見では、この町にできる中学校だから、この町の小学校から受けに行く者は、みんな入学できるぐらいの成績でなくっちゃ、学校として不名誉だ、と言うのだ。ところが、ぼくはまだ、だれが中学へ行くのかさえ調査していなかったのだ。…」

山本有三『路傍の石』84

6 トコロ

助詞を伴わずにトコロのみで接続助詞として用いる用法がある。前件・後件ともに現実に成立した事態でなければならず、かつ前件が先に起こり後件が後で起こったことを表わす。この構文も、トコロの持つ〈場面・状況〉という意味から生じたと考えられ、前件の事態が成立した〈場面・状況〉で後件の事態が成立したことを表わす構文であると了解される。

このように、前件が先に、後件が後に成立する場合にしか用いられないことから、前件のトコロ節を構成する動詞は必ず前件事態の「実現」を表わすタ形になる。

以上のような事情は、接続助詞用法のトコロガと一致して

おり、しばしばトコロをトコロガに置き換えることができる。しかしトコロ節は逆接（確定）という意味機能は持つておらず、逆接の意味が感じられない場合にはトコロガに置き換えると不自然になる。また逆に、前件・後件ともに現実に成立した事態である典型的なトコロガ文であれば、トコロガをトコロにおよそ置き換えることができるが、逆接の意味合いが薄れることになる。

(53) a 『七十年後、とある狩人^{かやうど}たちが一頭の麒麟^{きりん}を殺したところ、その角には孔子の母が結びつけておいた飾り紐^{ひも}がまだついていていた。…』

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』324

b 「あの時、なんだか様子が変だつたぜ」と言うと彼はこんな話をした、醍醐寺^{だいごじ}の板画を大事にしていたが、Mさんが度々来て売れとしつこく言うのを、非売品^{がんに}と頑固に断つていたところ、或る日自動車^{くるま}で来て、見るだけでいいから、というので見せているうち、隣室に立つた隙間^{すきま}に、抱えて逃げた、跣足^{はだし}で外に飛び出して追いかけたが、自動車だから間に合わぬ。そんな事から、板画というのが冷静を失う傾向がある。

小林秀雄「真贋」390

c だが、死んでいるにしても、うつちゃって置くわけには行かないのだ。骨ぐらひは探さなくてはならないだろう。渡辺がそう思いめぐらしていたところ、十日の朝、親戚の者が申しあわせたように五人前後して集ったの

で、みんなで相談して取敢ず渡辺と高丸が総代で広島へ来ることになったと云う。

井伏鱒二『黒い雨』 402

d 吾一は話の内容はわからないが、なんか父に關係のありそうなことらしいので、さつきから、ひとりで氣をもんでいたところ、突然、自分のほうに大きな声が飛んできたので、びつくりした。

山本有三『路傍の石』 448

e 吾一は雑誌に、はじめて当選したので、少しえらくなつたつもりでいたところ、次野から、あたまごなしにやられたので、すっかり、しよげ返つてしまった。

山本有三『路傍の石』 646

f その話というのは、彼の死ぬ一二年前のことらしい。

或日老いたる紀昌が知人の許に招かれて行つたところ、その家で一つの器具を見た。確かに記憶えのある道具だが、どうしてもその名前が思出せぬし、その用途も思い当らない。老人はその家の主人に尋ねた。それは何と呼ぶ品物で、又何に用いるのかと。中島敦「名人伝」 40

g 「政治のことは知りませんが、ただ一言申し上げたいのは、先般部下の将兵を、休暇でそれぞれの家庭へ帰したところ、戻つて来ての話に、何処でも食物の不足しているのには、一驚を喫しました」

阿川弘之『山本五十六』 840

また、トコロ文には、他に「見たところ」のような形で、前件に「見る・判断する」行為、後件に視覚内容・判断内容

をとる、さらに特化の進んだ構文も見られる。

(54) a 「でもほんとうにお上手よ、見わたしたところ、男で

一番巧いのは浜さん、女では綺羅子さん……」

谷崎潤一郎『痴人の愛』 249

b 「なるほど見たところ、衣服を着た時の姿とは違うて肉つきの豊かな、ふつくりとした膚。……」

泉鏡花「高野聖」 73

c などと間伸びのした、然も際立つて耳につく東京の調子で行る、……その本人は、受取口から見たところ、二十四五の青年で、羽織は着ずに、小倉の袴で、久留米らしい緋の袴、白い襯衣を手首で留めた、肥った腕の、肩の辺まで捲手で何とも以て忙しそうな、その癖、する事はさっぱり捗らぬ。

泉鏡花「国貞えがく」 168

d 彼らは殺到しながら、わめいた。察するところ、今朝、署から打った電報で東京の新聞社がかぎつけ、福岡の支局に急報したらしい。

松本清張『点と線』 49

7 トコロニ

格助詞二には、〈存在位置〉や〈着点〉を表わす用法があり、〈場所〉あるいは〈場面・状況〉を表わす形式名詞と相性がよい。すあんわち、トコロ節が表わす〈場所〉や〈場面・状況〉を〈着点〉とする移動から派生した構文が見られる。

(55)

a 能島さんは奥さんのお父さんと何やら立ち話をして、次に泉水のほとりに行って暫くまた立ち話をした。それから私たちの立っているところに来て、決意を持ったような顔つきで云った。

井伏鱒二『黒い雨』34

b 「いや、あれで、あの連中には、ちやあんと算用が合っているんだよ。それぞれねらっているところに、もうこんだじゃないか。——月謝なんか、自分たちが出すものじゃない、生徒から取りあげるものだからな。」

山本有三『路傍の石』696

そのような〈場所〉から〈場面・状況〉へと拡張したトロニの用例も多く見出される。トロニ節内の動詞はゆ・テイル・タイずれも可能であるが、これも外から当該の〈場面・状況〉への移動の際に、トロニ節の表わす事態が未実現・進行中・実現いずれの場合もありうることを表わしているようである。

(56) a 便所を出ると、今までリングで闘っていた船橋ジムのボクサーが、試合を終えて階段を降りてくるところに出くわした。

沢木耕太郎『一瞬の夏』645

b かまわずハンミョウ探しをつづけようとしているところに、老人がまたあわただしくやって来て、「すると、あんた、本当に県庁の人じゃないんですね？」

安部公房『砂の女』35

c みんなの泳いでいるところに帰って来ると、競泳をや

ろうという話が出たところだった。

新田次郎『孤高の人』98

d 和倉は美沙の態度など意にも介かしていないようだった。大方夫婦げんかでもしているところに、折り悪あしく自分が飛びこんでしまったとでも思っただのらう。

三浦綾子『塩狩峠』634

e ホテルからしばらく歩くと、舗道に三、四十人くらい男たちが坐り込んでいるところに出くわした。意外な光景だったが、彼らが坐り込んでいる建物がデیلیー・ニューズの社屋だということでした。ニューヨークは新聞ストの真つ最中だった。

沢木耕太郎『一瞬の夏』297

f 僕はそう決心して、肩から血を流している青年のあとについて行つた。川の水は、なるべく見ないようにした。九割がた渡つたところに、貨車が横に倒れて通りを塞いでいたが、身を伏せ匍匐ほふく前進で辛うじて渡ることが出来た。貨車の真下のあたりは川の水が浅いので、転がり落ちて重なりあっている大量の玉葱たまねぎが見えた。

井伏鱒二『黒い雨』114

g それでも徹吉は、相手の邪気のない笑顔にあわせて自然と頬ほがほころぶのを覚えた。そして、しばらくサロンで憩いおうかと歩きかけたところに、エジプトから同船した商社の桜井という男がきた。持前のがらがら声で船中

の誰彼を批評し、西洋人の女に「ケツ子さん」だの「マ
ル子さん」だのという渾名をつけては一人で笑いこける
という性癖の男である。 北杜夫『榆家の人々』 541

その他にも、「机の上に本がある」のような、存在構文が
抽象化した「：トコロニ：ガアル」という構文も見られる。

(57) a 駒子の肌は洗い立てのように清潔で、島村のふとした
言葉もあんな風に聞き手がえねばならぬ女とは到底思え
ないところに、反って逆らい難い悲しみがあるかと見え
た。 川端康成『雪国』 232

b デカダンスは情念の不定な過剰であるのではない。デ
カダンスは情念の特殊な習慣である。人間の行為が技術
的であるところにデカダンスの根源がある。情念が習慣
的になり、技術的になるところからデカダンスが生ずる。

三木清『人生論ノート』 64
c 中庸は一つの主要な徳であるのみでなく、むしろあら
ゆる徳の根本的な形であると考えられてきた。この観点
を破ったところに成功のモラルの近代的な新しさがあ
る。 三木清『人生論ノート』 132

d 冬山への挑戦という観念が大きな誤謬だった。戦いで
あると考えていたところに敗北の素因があった。山に対
して戦いの観念を持つておしすすめた場合、結局は負け
る方が人間であるように考えられた。

新田次郎『孤高の人』 470

e 田口みやが、加藤に縁取りのしたハンカチをくれたの
は六月に入ってからだった。ただの一枚のハンカチだっ
たが、縁取りを彼女自らがやったのだとことわってくれ
たところに意味があった。加藤は無造作に、そのハンカ
チをポケットに入れた。 新田次郎『孤高の人』 961

8 トコロへ

格助詞へも移動の方向あるいは着点などを表わす、(場所)
と密接に関わっている。そこで、言うまでもなく(場所)を
表わすトコロへの用例も少なくない。

(58) a 雪が吹きとばされて、蒼氷が顔を出しているとこ
ろへ来ると、加藤が先に立って、ステップを切った。その
辺まで来ると宮村のアイゼンの跡を見失ったが、雪の状
態と、彼等の前に立つ黒い壁の大きさで、稜線に近づ
いていることは明らかであった。

新田次郎『孤高の人』 1475

b 彼は送られてくる捕虜を片っぱしからそのコンクリ
ー卜槽に投げこみ、床もみえないくらいにたまったところ
へガソリンを注ぎ、火をつけた。開高健「パニッシュ」 81
この用法が(場面・状況)へと拡張された以下のような用
例も多く見られる。格助詞へが方向や着点を表わすことから、
そのような(場面・状況)へその外から移動することを表わ

す「入る・来る・帰る」などの動詞が主文に用いられることが多い。またトコロへ節内の動詞はゆ・テイル・タイずれも可能であるが、これも外から当該の〈場面・状況〉への移動の際に、トコロへ節の表わす事態が未実現・進行中・実現いずれの場合もありうることを表わしているようである。

(59) a 引越しの、小型トラックが外で待っていた。加藤がトラックの助手席へ乗りこもうとするとところへ、二階にいる油谷が外出先から帰って来た。

新田次郎『孤高の人』1243

b そのとき、吾一は学校から帰ったばかりだった。はかまをぬいでいるところへ、おとつあんが、ひよっこり帰ってきた。おとつあんは、彼に銅貨を一つ渡して、焼きイモを買ってこいと言った。よつぽど腹がすいているらしく、いやにせかせかしていた。

山本有三『路傍の石』4

c ひとり写真をながめてわらっているところへ、本校の校長先生がきた。その声をきくと、こんどは大石先生のほう思わず気をつけのようになって、げんかんに出ていった。松葉づえははなれていたが、まだまだびつこのあるきぶりを見ると、校長先生はちよつとまゆをよせ、気のどくがつた顔で見ていた。壺井栄『二十四の瞳』134

d 「こんどはあなたが先に立って歩いてください。あの小屋をこしらえているところへ寄って、荷物をおろして

から、槍の頂上へ登りましょう。いまのところ雷様はなさそうだ」矢部は道を加藤にゆずってから空を見上げていった。

新田次郎『孤高の人』368

e こうして母子が暗黙の理解のもとに嘘を事実のように固めてしまったところへ、徳山刑事と理一が、真実はそうではないだろう、と疑問を抱いて固めを破ろうと入りこんできたのである。しかし、すでにおそかった。

立原正秋『冬の旅』75

f 袋の口を絞って糸を綴じ終ったところへ、於継が急ぎ足で入ってきた。すぐ足許に加恵が見えるまで部屋の中に人がいるとは思わなかったらしい。

有吉佐和子『華岡青州の妻』131

g 母屋の方が急に騒がしくなった。ただならない気配に加恵が聞き耳を立て、青洲が牀を起したところへ米次郎が飛び込んできた。

有吉佐和子『華岡青州の妻』340

また、トコロへ節に評価の形容詞・形容動詞が用いられ、当該の〈場面・状況〉に対する評価を表わす場合もある。

(60) a 玄関に立つと、先生の大きな声が、そこまで聞こえてきた。こいつは悪いところへぶつかったな、と吾一は思った。

山本有三『路傍の石』698

b しかし窓の向うには、銀ビョウブが立て廻してあり、その上、客の言葉はカンジンなところへ来ると声を落し

てしまうので、なかなか聞き取れなかった。話の内容は大部分利権に関することだったが、金額の点になると、言葉が消えてしまつて、まったく書けなかった。

山本有三『路傍の石』 923

c 「閣下は、ちょうどよいところへおいでになりました。

いま真夜中の十二時五十分前。悪魔を呼びだせるのは日に一回、真夜中の十二時と決まつておりますので」

井上ひさし『ブンとフン』 189

ちなみに、トコロへには、トコロへ節の中と外に状態的な述語をとつて「そのうえ」といった〈累加〉の意味を表わすものもある。多くの場合、それら全体が、主節で表わされていることがらの理由を表わす。この用法はトコロへモツテキテという形も用いられる。

(61) a その日学校を退けて校門を出ようとすると、門から少し離れた所に雪枝の立っている姿が見えた。鉢が大柄なところへ、派手な着物を着ているので、雪枝の姿は葉のない桜並木の下でひびく目立って見えていた。

井上靖『あすなる日記』 90

b あわてて、さりげなく振りほどこうとした。だが、男の腕はびくともしなかった。もともと農家の生まれで、力自慢の腕白だったところへもつてきて、足が不自由になったため腕の力を使うことが多かったせいもあるう、たいへんな筋肉の力だった。

9 トコロカラ

格助詞カラも移動の起点といった、〈場所〉と関わりの深いものであり、そのような意味で用いられる例も見出される。(62) a さて、どちらへ行こう。どこへ行くという宛もなく、牧場の裏の仮寓から、それもよその軒下を借りたひとりぐらしの狭いところから、毎晩さまよい出る癖でこま

で出て来たのだから、このさき電車に乗って遠くへ行ってもよく、まぢかの酒ビール牛乳と附合つてもよいのだが、漫然と電車に乗ることにして、駅にまぎれこんで切符売場に立つと、すぐまえに例の女が上り三つ目の駅までの切符を買ったのにつれて、やはりおなじ切符を買い、やがて来た電車に、どやどやとひとに押されながら、女とおなじ箱に乗った。

石川淳「かよい小町」 306

トコロカラにもそれが〈場面・状況〉へと拡張した例が見られるのであるが、トコロニ・トコロへと異なるのは、それらが具体的な特定の〈場面・状況〉を着点とする移動を表わしていたのに対して、トコロカラは〈具体的な特定の〈場面・状況〉を起点とする移動を表わすものもあるだろうが〉〈情報の出所〉ないし〈根拠〉〈原因・理由〉を表わすものが多く見出される。このことは、移動の起点―着点関係と、論理

的な原因—結果、理由—結論関係とが隱喻的に近い関係にあることを意味しているのだろう。また、トコロカラ節内の動詞も、ゆ・テイル・タイずれも用いられるが、(原因・理由)となることからは、主節に対して未実現・進行中・実現のいずれでもありうるということなのだろう。

(63) a 栄子はもともと父の妾^{めかけ}だった。前身は何であつたか知らない。いつも濃い化粧をするところから見れば、どうせ何か水商売であつたに違いない。この家の中に化粧の濃い女が居ることだけでも、登美子は神経がいらいらした。栄子と口を利くだけで、頭に血がのぼるような気がした。彼女は多分、登美子の母が生きているうちから、父の妾^{めかけ}だった。母は晩年は不幸であつたに違いない。

石川達三『青春の蹉跌』56

b 娘は胸をこころもち傾けて、前に横たわつた男を一心に見下していた。肩に力が入っていると、少しいかつい眼も瞬^{また}きさえしないほどの真剣さのしるしだと知れた。男は窓の方を枕にして、娘の横へ折り曲げた足をあげていた。三等車である。島村の真横ではなく、一つ前の向側の座席だったから、横寝している男の顔は耳のあたりまでしか鏡に写らなかった。

川端康成『雪国』10

c 僕は、茶道の歴史などにはまるで不案内であるが、茶器類の不自然な衰弱した姿が、意外に早くから現れてい

るところから勝手に推断して、利休の健全な思想は、意外に短命なものだったのではあるまいか、と思つている。

小林秀雄「骨董」 366

d 西行は、すさびというものを知らなかった。月を詠んでも仏を詠んでも、実は「いかにかすべき我心」と念じていたのであり、常に其^そ処に歌の動機を求めざるを得なかったところから、同じ釈教の歌で慈円寂蓮の流儀から際^{きわ}立ち、花月を詠じて俊成定家と全く異なるに到つたのである。

小林秀雄「西行」 171

e 仮説という思想は近代科学のもたらした恐らく最大の思想である。近代科学の実証性に対する誤解は、そのなかに含まれる仮説の精神を全く見逃したか、正しく把握しなかったところから生じた。かようにして実証主義は虚無主義に陥らねばならなかった。仮説の精神を知らないならば、実証主義は虚無主義に落ちてゆくほかない。

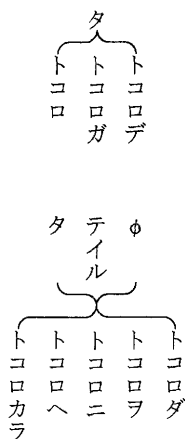
三木清『人生論ノート』 206

10 全体的見通し

以上見てきたように、トコロ文にはさまざまな意味・機能を持ったものが見出されるが、いずれもトコロの持つ(場面・状況)といった意味をもとに、それぞれが置かれた構文的な位置付けによって、独自の意味・機能を派生させたもので

あると了解される。

ここで、接続助詞用法のトコロデ・トコロガ・トコロは、それらが受ける節には必ずタが用いられるが、これはトコロ節が「実現」した後で主節が実現すること（以後）を表わす、相対テンスとして用いられていると思われる。それに対してトコロダ・トコロヲ・トコロニ・トコロヘ・トコロカラは、それが受ける節には ϕ ・テイル・タがいずれも用いられ、トコロ節に対して主節が（以前）（同時）（以後）いずれの場合もありうることを意味している。



おわりに

本稿では、トコロダという形式名詞述語文に限らず、接続助詞用法や接続詞用法を持つもの、あるいは主要部内在型関係節と言われる、トコロを用いたさまざまな複合辞に関して検討を試みた。特にトコロ構文に関しては、その全体像を理解する必要があると思われるためである。今後、他の形式名詞についても、形式名詞述語文以外の構文に関しても検討を

加えたい。

資料 『新潮文庫の一〇〇冊』（数字はCD-ROM版ページ）

参考文献

石垣 謙二（一九五五・一一）『助詞の歴史的研究』岩波書店

森野 宗明（一九六七・一一）『接続助詞と・ども（古典語）が（古典語・現代語）と・ころが・けれども（現代語）』『国文学』第十二巻第二号 学燈社 pp.72-75

霧岡 昭夫（一九七〇・九）『接続助詞と・ころがと』『と・ころで』の歴史―逆接仮定条件を表現する場合―（発表要旨）『国文学』第八十二輯 pp.107

遠藤 好英・小野 基・長田 久男・松井 利男・村上本二郎・山口 亮二（一九七〇・一〇）『特集・接続詞のすべて 接続詞小辞典口語編 あるいは1・あるいは2・おまけに・および・が・けれども、けれど・さて・しかし・しかしながら・しかも・したがって・すると・そして1・そして2、そうして・そのうえ・それから・それで・それでも・それとも・それなら・それに・だが、ですが・だから・だから・ただし・では・ときに・ところが・ところで・ないし（は）・なお・ならびに・また・または・もしくは』『月刊文法』第二巻第十二号 pp.65-87

飛田 良文（一九七〇・一一）『特集 日本語における助詞の機能と

解釈—接続助詞 は・と・とも・と・ども・も(へ)も(れども)〈とつろが〉(とつろび)『国文学 解釈と鑑賞』第三十五卷第十三号 pp.54-61

板坂 元(一九七一・三)『トコロ(日本語の生態の)』『国文学 解釈と鑑賞』pp.184-189

森岡 昭夫(一九七二・三)『とつろが』と『とつろび』の通時的考察—その逆接仮定条件表現用法の成立時期をめぐって—『国語学』第八十八輯 pp.43-54

Nakau, Minoru (一九七三・*) "Sentential Complementation in Japanese", *Kainakusya*

Kainakusya

Harada, Shin-ichi (一九七三・*) "Counter Equi NP Deletion", *Annual Bulletin* 7, Research Institute of Logopedics and Phoniatrics, University of Tokyo, pp.113-147

Kuroda, Shige-Yuki (一九七六・七) "Pivot-independent Relative Clauses in Japanese II", *Papers in Japanese Linguistics* 4 pp.85-96

M.A.K. Halliday and Rukaiya Hasan (一九七六・*) "Cohesion in English", *Longman Group Limited* (安藤貞夫他訳『テキストはこのように構成されるか—言語の結束性—』(一九九七・一一) ちくし書房)

寺村 秀夫(一九七八・六)『『トコロ』の意味と機能』『語文』第三十四輯 pp.10-19 (大阪大学)

寺川みち子(一九七九・三)『『トコロ』の現われるところ』『同朋国

文』第十二号 pp.49-70

西田 絢子(一九八〇・四)『端的・トコロデ・サカイ 国語資料としての駿河御譲本江湖風月集抄(1)』『東京成徳短期大学紀要』第十三号 pp.21-26

田山のり子(一九八二・七)『現代日本語における『ところ』—その意味と用法—』『国語学研究と資料』第六号 pp.1-11 (早稲田大学)

橋本 純(一九八三・一二)『昭和57年度修士論文レジュメ』連体修飾構造における被修飾名詞の形式化—『ところ』を中心として—『東京外国語大学特設日本語学科年報』第六号 pp.24-25

宮崎 茂子(一九八四・一〇)『特集・複合辞—たとへるととつろび』『日本語学』第三卷第十号 pp.35-41

森山 卓郎(一九八四・一〇)『特集・複合辞—ばかりだ／／ところだ』『日本語学』第三卷第十号 pp.13-20

西原 鈴子(一九八五・七)『逆接表現の三つの方向性』『日本語教育』第五十六号 pp.28-38

戴 宝玉(一九八七・六)『複合助辞』にしても・にしろ・にしたところで—接続助詞と限定助詞との関連—『日本語教育』第六十二輯 pp.56-67

名柄 迪・広田 紀子・中西家栄子(一九八七・一一)『形式名詞』荒竹出版

周 志媚(一九八八・七)『“ところへ” “ところを” “” ている

「ソフィア」的区別』『日語学習と研究』第四十九総第四期 pp.44-45 (対外経済貿易大学)

稲山 洋介 (一九八八・一〇) 「トコロ構文を含む文の構造」

『Literatura』第九号 pp.25-35 (名古屋工業大学)

井口 厚夫 (一九八八・*) 「ソフィア」に関する考察』『Sophia

International Review』第十号 pp.27-29 (上智大学)

趙 慧欣 (一九八九・三) 「現代日本語の接続副詞の研究—『しかし』『ところが』『でも』の働きについて—」『岡山大学国

語研究』第三号 pp.83-96

川越菜穂子 (一九八九・三) 「トコロダ文の意味と構造—情報のなわ

ばりとの関連で—」『大阪大学日本学報』第八号 pp.61-78

稲山 洋介 (一九八九・一一) 「現代日本語『トコロ』の意味的・統

語・文体的特徴」『Literatura』第十号 pp.1-25 (名古屋

工業大学)

加藤 弘 (一九八九・一一) 「補文をとる述語についての覚書」『日

本語学校論集』第十六号 pp.35-65 (東京外国語大学)

北野 浩章 (一九八九・一一) 「『しかし』と『ところが』—日本語の

逆接接続詞に関する一考察—」『言語学研究』第八号

pp.39-52 (京都大学)

大高 博美 (一九九〇・一一) 「『〜テイル』と『〜テイルソフィア』」『経

営と経済』第六十九巻第四号 pp.225-245

川越菜穂子 (一九九〇・一一) 「トコロの用法について」『帝塚山学

院大学研究論集』第二十五号 pp.134-144

Eve E. Sweetser (一九九〇・*) "From Eymology to Pragmatics:

Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure"

Cambridge University Press (澤田春美訳「認知意味論の展

開—語源学から語用論まで—」(二〇〇〇・一一) 研究社

出版)

伊藤 勲 (一九九一・九) 「ソフィアの用法」『国際学会日本語

学校紀要』第十五号 pp.61-73

赤羽根義章 (一九九二・一〇) 「接続詞『でも』『それでも』『ところが』『それどころか』をめぐって」『詞林』第十二号 pp.54-74

(大阪大学)

許斐 慧三 (一九九三・八) 「『ところが』補文のシンタックス」『言

語学からの眺望』九州大学出版会 pp.359-373

友次 克子 (一九九四・一一) 「知覚動詞の補部の構造」『主流』第五十

五号 pp.71-86 (同志社大学)

洪 競春 (一九九四・三) 「日本語の時間表現に関する一考察—『〜

タトコロダ』と『〜タバカリダ』の場合—」『中日本自動

車短期大学論叢』第二十四号 pp.87-99

杉本 武 (一九九四・三) 「警察はその泥棒が逃げて行くところを

捕まえた」再考—」『九州工業大学情報工学部紀要 人文・

社会科学篇』第七号 pp.109-132

中里 理子 (一九九四・三) 「『ソフィア』の接続助詞的用法について」

『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要』第三号

pp.141-149

- 梅林 博人 (一九九四・六) 「会話の『ところ』と文章の『ところ』」『都大論究』第三十一号 pp.13-22 (東京都立大学)
- 三原 健一 (一九九四・七) 「いわゆる主要部内在型関係係について」『日本語学』第十三巻第七号 pp.80-92
- 前田 直子 (一九九四・八) 「特集 条件表現—条件表現各論—デモ／タツテ／トコロデ／トコロガ—」『日本語学』第十三巻第九号 pp.104-113
- 川端 芳子 (一九九五・三) 「『ところ』について」『立教大学日本語研究』第二号 pp.9-16
- 坪本 篤郎 (一九九五・三) 「文連接と認知図式—いわゆる主要部内在型関係係とその解釈—」『日本語学』第十四巻第三号 pp.79-91
- 中里 理子 (一九九五・三) 「『ところ』の接続助詞的用法の発達過程について—(中古—中世前半)—」『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要』第四号 pp.128-120
- 劉 德慧 (一九九五・三) 「『ところ』について」『横浜国大言語研究』第十二号 pp.45-56
- 浜田 麻里 (一九九五・四) 「トコロガとシカシー逆接続語と談話の類型—」『世界の日本語教育 日本語教育論集』第五号 pp.193-207 (国際交流基金日本語国際センター)
- 川越菜穂子 (一九九五・五) 「『ところ』話が変わるけど—Topic shift marker について—」仁田義雄編『複文の研究 下』くろしお出版 pp.463-479

- 小矢野哲夫 (一九九五・五) 「格くずれ—ひとえ文とふたえ文とのあいだ—」仁田義雄編『複文の研究 下』くろしお出版 pp.1-26
- 渡辺 学 (一九九五・五) 「形式名詞と格助詞の相関—単文と複文をめぐって—」仁田義雄編『複文の研究 下』くろしお出版 pp.27-34
- 甲田 直美 (一九九五・六) 「転換を表す接続詞『と』について」『では』をめぐって」『日本語と日本文学』第二十一号 pp.31-42 (筑波大学)
- 富阪 容子 (一九九五・七) 「ロニエニケーションのための日本語—トコロダの表現機能—」『文化論輯』第五号 pp.1-18 (神戸女学院大学)
- 川越菜穂子 (一九九五・一〇) 「トコロデと話へ変ワリマスガ—話題を転換する形式—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 下』くろしお出版 pp.608-615
- Lee 風子 (一九九五・一二) 『日本語の補文構造』くろしお出版
- 佐藤 尚子・光信 仁美 (一九九六・三) 『日本語教材での『ところ』』『ところ』のあつかいについて』『千葉大学留学生ゼンター紀要』第二号 pp.83-100
- 田中 寛 (一九九六・三) 「トコロ節」における意味の連鎖性」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第八号 pp.1-58 (『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造—』(二〇〇四・二) 白帝社 所収 pp.434-490)
- Nonura, Masuhiro (一九九七・三) "On the Relative Condition of the

Japanese Internally-headed Relative Clause Construction" 『日

本女子大学文学部紀要』第四十六号 pp.91-113

馬場 俊臣(一九九七・三)『「タバカリダ」の影——「タコロダ

・タダケダ」との違いを通して——』『国語国文学科研究

論文集』第四十二号(北海道教育大学札幌分校)

池上 嘉彦(一九九八・二)「(モノ)と(コロ)——その対立と反転

——』『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語学論集』

pp.864-887 汲古書院

佐藤 雄一(一九九八・三)「トコロの意味と構文的機能——場面・

状況』を表す用法を中心に——』『千葉大学留学生センター

紀要』第四号 pp.45-63

野村 益寛(一九九八・三)『主要部』を欠く主要部内在型関係節』

『日本女子大学文学部紀要』第四十七号 pp.39-49

馬場 俊臣(一九九八・五)『動詞+トコロダ、バカリダ、ダケダ』

のアスペクト的用法とその周辺』『札幌国語研究』第三号

pp.7-18(北海道教育大学)

伊藤 紀子(一九九八・八)「形式名詞「ところ」が導く節に関する

一考察——いわゆる主要部内在型関係節を中心に——』『神戸

英米論叢』第十二号 pp.119-132(神戸英米学会)

沖 裕子(一九九八・一〇)「接続詞と接続助詞の『ところ』——

『転換』と『逆接』の関係性——』『日本語教育』第九十八

号 pp.37-48

加藤 理恵(一九九八・一一)「ところをくする」という構文の意

味記述』『言語の科学(Sudia Linguistica)』第十一号

pp.257-268(名古屋大学)

加藤 理恵(一九九八・三)「ところ」を含む文について——2つのタ

イプの構文とその解釈の可能性——』『名古屋大学人文科学

研究』第二十八号 pp.147-157

黒田 成幸(一九九八・一〇a)「主部内在関係節」黒田成幸・中村

捷編『ところの核と周縁——日本語と英語の間——』くろしお

出版 pp.27-103

黒田 成幸(一九九八・一〇a)「トコロ節」黒田成幸・中村捷編『こ

とばの核と周縁——日本語と英語の間——』くろしお出版

pp.105-162

近藤 純子(一九九八・一一)「複合辞「ところ」について」の論考』

『日本語教育』第41号 pp.11-20

加藤 理恵(二〇〇〇・一)『ところ構文』にこころの一考察』『国

際言語文化研究』第六号 pp.1-13(鹿児島純心女子大学)

近藤 泰弘(二〇〇〇・二)『日本語記述文法の理論』ひくし書房

楠本 徹也(二〇〇〇・三)「トコロの意味と機能に関する一考察」『東

京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第二十六号

pp.77-87

小林 幸江(二〇〇〇・三)「コロ」の意味と用法——文献にみる『ト

コロ』の統語的機能——』『東京外国語大学留学生日本語教

育センター論集』第二十六号 pp.221-229

長谷川哲子(二〇〇〇・三)「転換の接続詞「ところ」について——

書きこぼでの用法に関する一考察」『大阪国際大学留

学生別科研究報告論集』第三号 pp.20-27

李 淑姫 (二〇〇〇・八)「キリシタン資料における原因・理由を

表す接続形式—ホドニ・ニヨッテ・トコロデを中心に—」

『筑波日本語研究』第五号 pp.92-104

青木 三郎 (二〇〇〇・一〇)「*とら*の文法化」青木三郎・竹沢

幸一編『空間表現と文法』くろしお出版 pp.77-103

砂川有里子 (二〇〇〇・一〇)「空間から時間へのメタファー—日本

語の動詞と名詞の文法化—」青木三郎・竹沢幸一編『空間

表現と文法』くろしお出版 pp.105-142

川越菜穂子 (二〇〇〇・一二)「話題の転換」をあらわす接続表現に

ついて—「*やう*と」*や*「*や*にかへ」—」『帝塚山学院大

学人間文化学部研究年報』第二号 pp.130-142

清水 泰生 (二〇〇〇・一)「*や*」*や*「*や*」*や*」『埼玉大学国語

教育論叢』第四号 pp.87-77

赤羽根義章 (二〇〇〇・一二)「逆接の接続形式『*と*」*と*が』『宇大

語論究 大木正義教授退官記念号』第十二号 pp.12-20 (宇

都宮大学)

Ohori, Toshio (二〇〇一・三)「Clause integration as grammaticalization: A

case from Japanese tokoro-complements」Horie, Kaoru &

Sato, Shigeru (eds) "Cognitive-functional linguistics in an East

Asian context" pp.279-301 Kuroshio

小林 幸江 (二〇〇一・三)「*やう*」の意味と用法」『東京外国

語大学留学生日本語教育センター論集』第二十七号

pp.17-31

田中 寛 (二〇〇一・三)「空間認知における日タイ語対照研究—

〈トコロ〉と"hit"をめぐる—」『大東文化大学外国語学

研究』第二号 pp.89-114

前田 直子 (二〇〇一・三)「*した*と*ろ*」*と*「*した*ばかりだ」

『東京大学留学生センター紀要』第十一号 pp.29-44

中桐謙一郎 (二〇〇一・三)「*と*」の焦点化と曖昧化」『南大阪大

学紀要』第四卷第二号 pp.35-46

正宗美根子 (二〇〇一・三)「*と*」の用法について」『北陸大学

紀要』第二十五号 pp.97-105

田窪 行則・篠栗 淳子 (二〇〇一・一〇)「日本語条件文と認知的

マッピング」大堀壽夫編『認知言語学Ⅱ』東京大学出版会

pp.135-161

池上 嘉彦 (二〇〇一・一二)「*く*」の出来する場としての自己(1)

〈*モノ*〉と〈*コト*〉そして〈*トコロ*〉—日本語における

〈主観性〉を巡って—」『月刊言語』第三十一卷第十三号

pp.72-83 大修館書店

加藤 理恵 (二〇〇三・一)「多義的な名詞『*と*』のスキーマに

ついて」『国際言語文化研究 大塚定徳教授記念号』第九

号 pp.65-84 (鹿児島純心女子大学)

謝 新平 (二〇〇三・三)「*と*」構文の一分類について—「補

文述語句が表す状況」の視点から—」『地域文化研究』第

一号 pp.60-80 (地域文化研究学会)

秋月 康夫 (二〇〇三・四)『テいたところ』が表す局面としての『途

切れ』相『日本語教育』第百十七号 pp.53-62

吉川 武時他編 (二〇〇三・八)『形式名詞はこれでわかる』ひつじ

書房

加藤 理恵 (二〇〇三・九)『逆接を表す『ところ』の意味記述』『世

界の日本語教育日本語教育論集』第十三号 pp.161-173 (国

際交流基金日本語国際センター)

丸尾 誠 (二〇〇四・)『中国語の場所名詞について—モノ・ト

コロという観点から—』『言語文化論集』第二十五卷第二

号 pp.151-116

坂元 岳彦 (二〇〇六・三)『「たところ」と「たばかり」につい

て』『甲南大学紀要文学編 日本語日本文学特集』第百四

十三号 pp.33-48

加藤 理恵 (二〇〇七・三)『「ところ」構文』に用いられる主動詞の特

徴について—アスペクト的特徴を中心に—』『国際人間学

部紀要』第十三号 pp.1-20 (鹿児島純心女子大学)

菊田 千春 (二〇〇九・三)『文法化としてのトコロ関係節の成立—

主要部内在型関係節との比較からみえるもの—』『同志社

大学英語英文学研究』第八十四号 pp.71-106

木村 亜弓 (二〇〇九・三)『形式名詞『ところ』の一用法—『Pと

ところをみるとQ』構文をめぐる—』『国文橋』第三十五

号 pp.45-32

馬 燕青 (二〇〇九・三)『話しことばにおける接続詞トコロガの

関連性理論による分析』『二十一世紀東北亜日本研究論文

集』pp.296-302

加藤 理恵 (二〇一〇・三)『小説における『ところ』節の使用傾向

とその特徴について』『国際人間学部紀要』第十六号

pp.31-44 (鹿児島純心女子大学)

(いじま まさひろ 人文社会研究科 教授)